

常に本質を問う

昭和の終わり（1980年代後半）、小・中学校には、長期にわたって登校しない児童生徒が見受けられるようになった。勤勉であること・休まないことが美德であり、「皆勤賞」を目標にした時代でもあり、「登校拒否」とよぶ長期欠席は、大きな教育問題となっていた。

当時の改善目標は、「再登校」であり、毎朝、順番に呼びに行ったり、時には、力づくで連れ出したりと、お互いに大変だったように思う。

そんな時、“「再登校」という目標は、短絡的ではないか、もっと長いスパンで見て、「社会的自立」を目標に置くべきではないか？” “長期欠席の原因は、もっと深いのではないか、本質は何か？”と、隣のT先生に問われ、目先の諸事にとらわれず、「本質は何か？」を見つめ、身体症状が現れない程度に登校刺激を行いながら、少し長い目で見守り、興味・関心のあることに挑戦するように働きかけた。

T先生には、その後も、折に触れて、『本質』に関して教えを請うことがあった。

教育（子育て）のねらいについては、「自立と共生」が本質、自己を表現する強さがなければ人として生きてはいけない、また、他と共に生きようという優しさがなければ幸せにはなれないだろうと。

そのような視点で、本県小・中学校の教育目標を見てみると、皆、「自立と共生」で括ることができる。将来を見据えて計画を立てるとき、また、いろいろな課題に直面したとき、「自立と共生」を物差しとして照らし合わせればぶれることはない。

目先のことに気をとられて、突っ走ることが多い。しかし、時々、このレールは、どこへ通じているのか、横道へそれていないか、途中で止まっているか、自分の歩んでいる道はこれでいいのかと問いかける必要がある。常に「本質」を問いながら。